

図書館主導で実現した Shibboleth 認証

利用者のニーズから誕生した、いつでもどこからでも使える図書館サービス 千葉大学

図書館サービスのシングルサインオン化や学外からの電子ジャーナルの利用を実現するため、図書館が主体となって Shibboleth 認証を導入した。こうした利用者環境の改善から出発した取り組みが、図書館サービスの利用促進に結びついている。

課題

学外から電子ジャーナルサービスを利用できる環境の実現は、電子化された図書館資源の有効利用を図る上で重要な課題である。また、利用者の立場で考えるならば、複数のサービスを1回の認証で利用できるシングルサインオン(SSO)化が望まれよう。これらのサービスを利用者に提供するため、本学では、学術認証フェデレーション(学認)の活用を検討した。

解決策

全国の学生・教職員を対象にした図書館に関する調査では、回答者の3分の1が電子ジャーナルサービスを学外から使いたいと答えている。本学では、電子ジャーナルを学外から利用できるリモートIDを発行しているが、このリモートIDの取得率はわずか2.7%であった。この結果から推察すると、IDの申請手続きが利用者の負担となり、その煩わしさがサービスの利用機会を奪う一因になっていると思われる。情報インフラの進展に応じてサービスの進化も求められている。

また、文献利用環境のSSO化も重要な課題である。文献の利用は、“検索する”、“読む”、“管理する”という、一連のプロセスから成り立っているが、それぞれの機能をサポートするツールは提供元が異なるので、サービスごとにID・パスワードを求められる。文献利用プロセスで用いられる複数の認証をSSO化できれば、文献調査に集中できる環境を利用者に提供できる。利便性を考えればSSO化は必須である。

本学ではこうした課題を解決するために、学認に参加して Shibboleth による認証連携を導入した。図書館がサービスの主体となり、情報部門である総合メディア基盤センターとの緊密な連携のもとでサービスを運営している。これにより、電子ジャーナルの学外利用に加え、SSO化も実現できたが、この成功は Shibboleth の適応範囲の広さに頼っているところも大きい。実は

本学のLDAPでは学認が推奨するすべての属性情報を満たすことができない。そこで発想を逆転させ、LDAPにない属性を必要とするサービスには接続せず、必要な属性情報が比較的少ない、図書館資源に特化してサービスを提供する、という運用面での割り切りによって対応している。こうした柔軟な対応が可能なのも Shibboleth の特長である。

その一方で、利用者が陥りやすいトラブルを未然に防ぐ“ヘルプ”を充実させるなど、利用者の使いやすさについてはできる限りの手を尽くしている。

結果

Shibboleth 認証の導入で、IPアドレス認証では把握することが困難であった、属性ごとの利用状況を調べることが可能になった。それによると、電子ジャーナルサービスを学外から利用した者の25%が学部学生であった。従来、電子ジャーナルの学外利用は院生以上に限定しており、学部学生の利用はそれほど多くはないものと考えていた。ところが、誰もが気軽に使えるサービスになったことで利用機会が増え、学部学生の利用を促したと考えられる。

一方、学認を通して利用できるサービスは、まだ決して多くはない。より多くのサービスが学認から利用できるようになることを期待している。

(千葉大学附属図書館 野田 英明)

